

私もやっと、少しは大人になったと苦笑い。年末、自分がまさに歴史の奔流にいることを実感しているからだ。師走にもかかわらず、気温24度の東京はまるで人間に対する地球からの最後の警告のようだった。

激動の2015年もあとわずかか。戦慄と危惧の渦中で迎えた戦後70年だった。

今年は、衝撃的なフランスのシャルリー・エブド襲撃事件から始まり、イスラム教スンニ派過激組織「イスラム国」(IS)による日本人殺害事件が私たちを震撼させた。そして、ついにパリ同時多発テロを発端に、テロの脅威は世界中へと広がった。

時代はかくも激しく変化し、もはや人間の力は追いつけないのかもしれない。

「生物は強いものが生き残ったのではなく、変化できるもののみが生き残ったのだ」

当たり前前の幸せを子供たちに



という言葉が浮かぶ。しかし、愛と英知を持たない強欲で狡猾なエゴイストばかりが生き残った世界に幸せはあるのだろうか？ 子供や女性、老人への虐待、自殺、戦争と、今なぜ、人の心がこれほどまでにすさんでいくのか。私たちは何のために、誰のために発展し、進歩を求めているのか？ それで魂は満たされるのか。

命は祖先からつながり、私たちまでもたらされた尊い宝だ。何人もその命を無残に剝奪することは許されない。命はいかなる時代も肌のぬくもりと子守歌で守られ、育まれてほしい。

私たちは、優しさとはほほ笑みを与え合う善なる力を持っている。未来の歴史を切り開くのは私たち一人一人。幸せになろう。きっと、まだ間に合うはずだ。

人間が人間らしく自由に心豊かに暮らせる幸せを、もう一度、考えてみよう。未来を担う子供たちに残せる本当の幸せのために、異なった文化を尊重し合い、相互理解を持つ世界を目指そう。

今年を振り返り、ふと目をつぶると、お正月を前に母のお節料理の手伝いをした昔を思い出した。こういった当たり前前の幸せを、子供たちが享受できるような世界を作っていけないものだろうか。

年の終わり、ヴェルディのレクイエム、「リベラ・メ」が私の心を突き刺すように鳴り響いている。

(さとう・しのぶ＝声楽家)

—毎月第3金曜日掲載